

合唱組曲「北九州」

栗原一登 作詞
團伊玖磨 作曲

I. 序 章

筑紫なる 北の わが街
緑なす(緑なす)山波 遠く
潮路分け(潮路分け)産土開く
北九州 北九州 ふるさとや良し

海に沿い 山野を巡り
日に月に(日に月に)父祖は 夢見て
ここに興す(ここに興す)港と街を
北九州 北九州 ふるさとや良し

風薫れ 栄の街に
われら生き(われら生き)今日も安らぐ
北九州 北九州 ふるさとや良し
北九州 北九州 ふるさとや良し

II. 早鞆の瀬戸を渡し給え

早鞆の 瀬戸を 渡し給え
早鞆の 瀬戸を 渡し給え
雲を 越え
波を 駆け
橋を 渡り
海底の 道を くぐり
八重垣の 雲を 越え
渦潮の 波を 駆け
中空の 橋を 渡り
地に 深き 海底の
道を くぐり
早鞆の 瀬戸を 渡し給え
九州がある 北九州がある



関門海峡

III. 風

九州の シャッポが 北九州
うちらが 生まれた 北九州
東が吹いたら 工場の匂い
西が吹いたら 街の風
どんな風でも さらりと来い
お日さまかついで 吹いて来い
もじ もじ(門司)するな こくら(小倉)す
八幡 やめとけ 煙が逃げる

九州の おデコが 北九州
うちらが 住んじよる 北九州

南が吹いたら 草木の匂い
北が吹いたら 海の風
どんな風でも さらりと来い
故郷の 匂いで 吹いて来い
戸畑 飛んでみろ 洞海湾
若松脇田で 泡ふいた 蟹の子

IV. 九州の山は

燃える鋳炉に 股火して
皿倉山が 言うたげな
今夜の 風は 身にしみる
福智の嶺にや 雪が来た
足立よ 尺よ 戸ノ上山よ
風師も来んな ハックショイ
ぬかみそ煮込みで 盃交わそ
ハックショイ ハックショイ

皿倉山の 大クシャミ
波は ドンとはね 響灘
沖の藍島 腹かいち
サバやイワシに 言うたげな
九州男と 九州の山は
思い立ったら 夜も日もないけ
今夜は気をつけ 河豚にも知らせ
ハックショイ ハックショイ



東田第一高炉

V. 河童の歌 —旧五市の結びを

「豊前の 太郎河童が
筑前の 姫河童に 惚れたったい」
「ちがう ちがう」「そりゃちがう」
「筑前の 姫河童が
豊前の 太郎河童に 惚れたったい」
「ちがう ちがう」「そりゃちがう」
カッパ ヨイヨイ アシヘイサン
アンタノ カッパハ イマドコナ

「どっちが惚れよと どっちでもええ
惚れた同志に 違いはないけ」
「そうたい そうたい そうたい」
惚れた同志の めでたい祝儀
筑後の河童が 羨んだ
豊後の河童も 妬いとった
カッパ ヨイヨイ アシヘイサン
アンタノ カッパハ イマドコナ



若戸大橋

VI. 港

「かあさん ごらんよ 白い船」
「どここの国から 来たんでしょう
お客を乗せた 旅の船」
「とうさん あれは なんの船
汽笛を鳴らして 出て行くよ」
「海の男の 動く城
海幸探す 漁業船」
きらら きららの 波を分け
出船 入り船 海の街
帆柱山が 見ているよ

「あの船 なんでしょう 重そうね」
「いっぱい 貨物を 積んだのね
遠いお国へ 旅立ちよ」
「飛ぶ飛ぶ 小さな 赤い舟」
「フェリーボートよ 見て あそこ」
「ポンポン蒸気も やってくる」
「こっちに 大きな タンカーよ」
きらら きららの 波を分け
出船 入り船 海の街
帆柱山が 見ているよ



河童封じ地蔵

VIII. 祭り —地蔵祭り

「明日の晩は お地蔵さまでございますけ
米に小豆に提灯に ろうそく ろうそく無ければ
ろうそく代を つかあさい」

提灯 ぶらぶら 灯がつけば
にこにこ うす目の 地蔵さま
小屋は せまいが さあ さあ さあ
大きな おにぎり かぼちやの にしめ
線香上げたら 食べては 歌おう
ソラ来イ ミンナ来イ
オ地蔵サマヤケ 大人モ来イ

団扇 さわさわ 夏の月
今夜は こどもの お籠りだ
小屋は せまいが さあ さあ さあ
お茶も わいたぞ 小豆も煮えた
線香上げたら みんなで 踊ろう
ソラ来イ ミンナ来イ
オ地蔵サマヤケ 大人モ来イ

VII. 石の羊 —平尾台断章

姫百合の 朱き 山端に
うづくまり 肩寄せ合いて
何を聴く 石の羊よ
草の根の 悲しき歌か
地の底の 化石の声か
しらじらと 群れて 動かず

流れ行く 霧の 濡れ野を
音も無く 何処へ向かう

カルストの 羊の群れよ
波白き 周防の彼方が
遥かなる 天の雲野か
永久の 歩みも 重く



平尾台 25



小倉祇園太鼓

IX. 祭り 一太鼓祇園

「ア ヤッサ ヤレヤレ
ア ヤッサ ヤレヤレ
関の先帝 小倉の祇園
雨が降らねば 金がふる」

うら(裏)は とうちゃん
おもて(表)は おれだ
祇園太鼓の 歩き打ち

聞いて かあちゃん
祇園の太鼓
思い出すだろ 遠い日を

いいぞ にいちゃん
ジャンガラ鳴らし
ゆれる提灯 宵祇園

お出で ねえちゃん
八坂の祇園
揃いゆかたの 夏祭り

X. 父祖より幼き者へ

[祖父母の歌]

吾子よ 孫子よ
われらは 拓いた
この街の 歴史を

[父母の歌]

父祖よ 愛し子
われらは 築いた
この街の 栄えを

[子等の歌]

父母よ 祖父母よ
われらは 受け継ぐ
この街の 未来を

ふるさとよ
永久に奢らず 病むことなかれ

わが街よ
永久に 新たに 明日に 拓がれ



小倉城

XI. 梅開く

今日もまた
太陽は 周防の灘を上り
玄海の 濤に沈む
毎日の 巡りにありて
われら ふるさとを愛し
喜びも 悲しみも
この街と 共にす

風よ 大いなる未来を運べ
街よ 永久に若やげ
人よ 恒に幸あれ

北九州 いま 梅開く

XII. 終章

筑紫なる 北の わが街
緑なす(緑なす)山波 遠く
潮路分け(潮路分け)産土開く
北九州 北九州 ふるさとや良し

海に沿い 山野を巡り
日に月に(日に月に)父祖は 夢見て
ここに興す(ここに興す)港と街を
北九州 北九州 ふるさとや良し

風薫れ 栄の街に
われら生き(われら生き)今日も安らぐ
北九州 北九州 ふるさとや良し
北九州 北九州 ふるさとや良し